

豊かな自然に 人情添えて

座談会

— 作ろう「魅力ある観光くまもと」 —

熊本県は、阿蘇・天草の国立公園をはじめ美しい自然、多くの文化財など豊かな観光資源に恵まれております。これらを積極的に活用し、観光産業の振興を図っていかねばなりません。

県は「新しいふるさとづくり」をめざして、特に本年度は「魅力ある観光地くまもと」をつくらうと、農林水産業、中小企業等の振興に合わせて観光産業を振興し、雇用の場を拡大し、これが地域開発にもつながるということで、重点施策に取り上げています。そこできょうは、三人の方を迎え、田辺商工観光労働部長と「観光くまもと」について話し合ってもらいました。

出席者

東海大学講師 菅 芳生氏	熊本県観光連盟 理事 竹下常夫氏
78年ミスワールド 日本代表 山口裕子さん	県商工観光労働部 田辺寛三郎

積極的に振興策を推進

田辺 観光産業の振興は雇用の場を拡大し、この広がりが地域開発にもつながるということで展開されています。その中で本年度は施設の整備とか魅力ある企画行事等をつくって観光の目玉にしたいということですね。

このようなことで本年度は「観光くまもとフェスティバル」を実施したわけでございます。皆さんのご協力ほんとうにありがとうございます。

これから観光産業の振興については本年度から新たに計画を見直そうと観光資源の活用調査を市町村ごとに実施し、更に観光業界の意見もお聞きしながら、個別に、ブロック別に九州の中での熊本の位置づけを考えていかなければなりません。

熊本の観光客は、県外客より県内客が増えています。このような中で、観光施設につきましても必ずしも十分ではない問題点もあるようです。

阿蘇は熊本の観光の大きな目玉であることは事実です。ところが今年は五十二年を上回る長期の立入規制が続いているわけですね。今後もこの規制をどうするか、人命尊重、観光の両面から検討が

けられています。

それから熊本の人情という問題、また行きたくなくなるような熊本について、地理的条件、資源、施設、宣伝方法など、こういう点について自由に発言していただきたいと存じます。

竹下 熊本の観光に対してこれまでいろんな反省なり批判が多くあったと思うのです。これを行政も業界も一緒になって何とかしなければいけないという気持ちが盛り上がってきています。そういう時期に県が今年度第一課題に取り上げられたのはタイミング的に非常に良かったと思います。批判するだけで一緒にやろうという気持ちが形成されていなかったからですね。それが非常に大きく動き出したという感じがします。これが一番大事なことで、単に行政にまかせておいてはいけません。熊本はやっぱりな資源を持っていますから、これを何とか生かさないといけないですね。この次の段階ではこれを末端部門までもって行こうという運動が起こってくるような感じがします。

田辺 総論的に観光行政の盛り上がりが見られるということですね。

菅 私は熊本に帰って六年になりますけど、熊本で感じますことは宣伝不足ということですね。

昨年熊本県を訪れた観光客数は、県内客を入れて約二千三百万人弱ですけれども、その内熊本、阿蘇、天草と横断観光ルートを利用された方が約六割を占めているわけです。これをうまく県内の他の観光地になり、例えば、阿蘇にしても火口だけでなく、他にたくさん見る所はあるわけです。裏道を知っていたり、目立たない所を案内すると喜ばれますよ。こんな所もあるよ、こんな遊びもあるよという宣伝も必要ではなからうかと思えます。

それから、ガソリンスタンド、食堂が広告を兼ねて、観光ガイドマップを作った店に置いておくと、立ち寄られた方には一目でわかります。

実際に県外から来られた方の手許にはパンフレットは手に入りにくい状態じゃないかと思えます。

竹下 熊本の場合、資源があまりに多いんです。点的存在であって線として結びつきがないということが、結果的には素通りしてしまうということでしょう。県民全体が余りに恵まれていて、その中にいるために他との比較ができず安住してしまっているという感じがします。きめ細かなものを見落している。ところが外部からみるとそれが重要な点ですね。

うことが逆に都会から来た人にとっては、めずらしいものばかりなんです。ね。

竹下 県の特産品の紹介、これは県産品の振興のために大事なことで、大きな役割を持っているわけです。これからは容易にできる方法を考えなくてはならないと思いますね。

それから食べ物も、観光のやり方なども、都会と同じものをつくりあげようとする傾向がありますね、そういう発想は私は逆だと思えます。ローカルの特産品というものを提供することが大切で問題じゃないかと思えます。



竹下常夫氏

